

ランチョンセミナー：10月 7日(金) 12:00~12:50 (1~6)
：10月 8日(土) 12:00~12:50 (7~14)
：10月 9日(日) 12:00~12:50 (15~20)

■ランチョンセミナー1.「BNP検査の標準化 ―その意義と進め方―」

演者1：榎田 出 (康生会クリニック 内科)

演者2：篠原 亮太 (北里大学病院 臨床検査部)

座長：村上 正巳 (群馬大学大学院医学系研究科臨床検査医学)

BNP検査は心不全治療において必須となっており、その活用範囲は急性期のみならず一般医を含む日常臨床や一次予防の世界にも広がっています。その結果、様々な場面で各々に適した多種のBNP検査試薬が用いられるようになりました。

施設間の検査情報のやり取りにおいて、BNP検査は概ねの標準化が既になされているためシームレスな検査の受け渡しは円滑に実施されています。一方で誰もがいつでもその現状を把握し安心して検査値を受け渡し出来るという共通の認識を得るレベルの「透明化」まで至っていないのが現状です。

そこで本講演では今後これをどのように推進し維持すべきかを中心にフロアのみなさんと議論する場にしたいと思います。

共催：塩野義製薬株式会社

■ランチョンセミナー2.「新型コロナウイルスにおける各種測定法の位置づけ」

演者：藤野 達也 (国立病院機構指宿医療センター 研究検査科)

座長：前川 真人 (浜松医科大学 臨床検査医学講座)

2021年12月から3回目のワクチン接種が始まり、COVID-19の発症や重症化の予防が期待される一方、ブレークスルー感染も多数報告されており、ワクチンの効果がどの程度あるのか、ということで関心が高まっている。それを明らかにすることは、今後定期的なワクチン接種が必要であるのか、見極めに大変重要である。我々もワクチン接種後の抗体価の推移について検討しており、3回目の効果に注目しているところである。

本講演では、各種検査法の使い分け方について、実際の症例も提示して述べる。また、ワクチン接種後の抗体の動態やワクチンの効果についての情報、そして、現時点での感染を確定する診断法である、核酸検査と抗原検査の情報について提示する。

共催：シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社

■ランチョンセミナー3.「健診や人間ドックにおけるsdLDLコレステロール検査の進め方」

演者：藍 真澄 (東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 保険医療管理学分野)

座長：山本 泰司 (一般財団法人 関西労働保健協会 事業局)

本セミナーでは、動脈硬化リスクとしてのsdLDLコレステロール(sdLDL-C)値に関する知見を含めて、総合的な観点で健診・人間ドックにおける判定基準案を見直した結果について概説する。集積されたデータの解析により、健診・人間ドックにおける判定基準案について、sdLDL-C値 25mg/dL未満を「異常なし」、25~34.9mg/dLを「軽度異常」、35~44.9mg/dLを「要経過観察」、45mg/dL以上を「要治療」とした。ただし、35mg/dL以上で他の動脈硬化リスク(他の脂質異常、糖尿病、高血圧、肥満、喫煙、家族歴、男性)が併存する場合は、要治療と判定される45mg/dL以上とともに受診勧奨とするのが妥当と考えられた。動脈硬化リスク判定において従来の検査項目に加え、sdLDL-C値を測定する意義が改めて

確認された。

共催：デンカ株式会社

■ランチョンセミナー4. 「新たに保険適用となったプロステートヘルスインデックス
(*phi*) を組み入れた新しい前立腺がん診断フロー」

演 者：押野見 和彦（昭和大学医学部 泌尿器科学講座）

座 長：深貝 隆志（昭和大学医学部 泌尿器科学講座）

準備中

共催：ベックマン・コールター株式会社

■ランチョンセミナー5. 「糖尿病患者の心疾患管理における NT-proBNP の役割」

演 者：浜野 久美子（独立行政法人 労働者健康安全機構 関東労災病院 糖尿病
・内分泌内科）

座 長：上野 智浩（大阪大学医学部附属病院 医療技術部検査部門）

準備中

共催：ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

■ランチョンセミナー6. 「肝細胞癌診療における AFP-L3 分画測定の意義」

演 者：玉井 秀幸（和歌山労災病院 肝臓内科）

座 長：田中 正俊（社会医療法人ヨコクラ病院）

AFP: α -fetoprotein は、肝細胞癌で産生される糖蛋白であり、肝細胞癌の腫瘍マーカーとして用いられるが、慢性肝炎や肝硬変でも上昇する場合があります、その特異度は低い。AFP は、糖鎖構造の違いにより、レンズ豆レクチン (LCA) との親和性が異なり、LCA と親和性の強い AFP-L3 分画は、肝細胞癌で産生される傾向が強く、特異性の高い腫瘍マーカーである。本セミナーでは、肝発癌リスク評価、肝癌スクリーニング、悪性度診断、治療方針の決定、再発リスク評価、予後予測といった肝癌診療における一連の流れの中において、AFP-L3 分画の測定の意義について解説する。

共催：富士フィルム和光純薬株式会社

■ランチョンセミナー7. 「地域医療を護るために、臨床検査部門が目指すべき姿を考える」

演 者：伊藤 克彦（留萌市立病院 診療技術部 臨床検査科）

座 長：脇田 満（順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床検査部）

当院の置かれた留萌医療圏は、急速な少子高齢化と都市部への人口流出に伴う人口減少が進み、限られた医療資源の中で、安定した医療を継続的に提供することは大きな課題である。そのような環境下において、検査部門は業務効率を高めるだけでなく、状況変化により柔軟に対応し、常に検査を最適化できる体制が求められている。地域医療環境と当院の在り方を踏まえた将来の検査部門構築を見据え、この度 Alinity ci シリーズ、AlinIQ シリーズを導入したため、その背景と導入後の効果について報告する。

共催：アボットジャパン合同会社

■ランチョンセミナー8. 「院内完結型ゲノムラボの構築～見えてきた展望と課題～」

演者①：渡邊 広祐（東京大学医学部附属病院 検査部）

演者②：小野 佳一（東京大学医学部附属病院 検査部）

座 長：矢富 裕（東京大学医学部附属病院 検査部）

がんの分子診断は日常臨床に必須のルーチン検査となっているが、中でも次世代シーケンサー（NGS）を用いた遺伝子パネル検査は、変異を一括して同定することが可能であり、網羅的な分子診断として極めて有用である。当院はがんゲノム中核拠点病院であり、2021年度に遺伝子検査室に NGS を導入し、OncoGuide™ NCC オンコパネルシステム、自由診療の Today Onco Panel 検査、研究用エクソーム解析を行っている。本演題では、NGS 導入の経緯や運用、検査の品質指標、院内検査の中で見えてきた課題について解説する。

共催：シスメックス株式会社

■ランチョンセミナー9. 「院内各所で活用される POC 機器の精度確保・維持を目指して～マネジメントシステムを活用した POC 機器の集中管理～」

演 者：大塚 喜人（医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 臨床検査部）

座 長：柳原 克紀（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 病態解析・診断学分（臨床検査医学））

POC 機器は新技術や項目の追加が進み、日常診療では欠かせないものとなった。当院でも患者状態を迅速に判断できる有用な検査機器として、院内各所に設置している。一方で、これらの POC 機器における検査精度については、まだまだ改善の余地があり、複数の診療科に点在する検査機器の日常の精度管理はもちろん、操作者の知識や技術のレベルを一定に保つことが重要と考えている。

当院ではこの度、複数のメーカーの POC 機器をオンライン接続し、臨床検査室にて一括集中管理することができるシーメンス社製ポクセレーターを導入した。本講演では現状における POCT の問題点と新たなシステムによる運用、活用への取り組みを紹介する。

共催：シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス株式会社

■ランチョンセミナー10. 「検査室改善のアプローチ 21 -臨床検査室における業務改善とは？LIS や LAS の視点から-」

演 者：新井 順（株式会社エイアンドティー マーケティング部）

座 長：荒木 秀夫（株式会社東京未病センター TMC 日本橋ラボ）

日々移り変わる医療の最前線。その中でも臨床検査を取り巻く環境は、刻一刻と目まぐるしい状況の変化が見て取れます。特に、臨床検査室に求められる業務は年々増加し、検査スタッフの業務効率化などの対策を強く求められているのではないのでしょうか。

本セミナーでは、臨床検査に携わるユーザー様にとって、有用な情報提供の場となれば幸いです。

共催：株式会社エイアンドティー

■ランチョンセミナー11. 「確実な採血認証を検査室から病棟へ～TRIPS-WEB の導入を通して検査前プロセスのトレーサビリティをレベルアップ～」

演 者：遠藤 彩子（地方独立行政法人東京都立病院機構 東京都立多摩総合医療センター 検査科）

座 長：市村 直也（東京医科歯科大学病院 検査部）

採血時の患者及び採血管の確認、検査室への確実な提出は重要な事項です。採血室内での採血はシステムの進歩に伴い、認証のデジタル化が普及しつつあります。しかし、病棟や外来での採血や検体採取においては、電子カルテでの依頼があってから検体提出の間の様子は検査室からはわかりづらいのが現状です。ISO15189では5.4検査前プロセスの項で採取日時、必要な場合は採取時間の識別、また搬送及び受取においても時間の記録管理が求められています。

当院では今年、システムを拡張し採血時の認証や提出・搬出確認を病棟へも展開しました。TRIPS-WEB導入までの経緯を含め現状をお話したいと思います。

共催：株式会社テクノメディカ

■ランチョンセミナー12. 「HbA1c測定とヘモグロビン異常症」

演者：宮崎 彩子（兵庫医科大学 医学部 臨床検査医学講座）

座長：松岡 孝昭（和歌山県立医科大学 内科学第一講座）

HbA1cの発見は電気泳動による異常（変異）Hbの発見を起点としている。電気泳動によりHbAだけでなく、健常人にも複数のバンドがあることがわかった。それらはA1a、A1b、A1c、A1d、A1eの亜分画に分離され、糖尿病患者検体では病状の消長とともにA1c分画が増減していることがわかった。複数の分離方法が研究され、中でも高速液体クロマトグラフィー（HPLC）はHb各成分の分離が良好で再現性が高く臨床検査として優れており、1980年代から変わらずHbA1c測定の主流である。

一方、HbA1cの測定に際し、Hb異常症の存在は糖尿病の見落としや不適切な治療につながる可能性があり、注意が必要である。

共催：東ソー株式会社

■ランチョンセミナー13. 「血友病と加齢疾患」

演者：長尾 梓（荻窪病院 血液凝固科）

座長：森下 英理子（金沢大学 医薬保健研究域 保健学系病態検査学）

近年、血友病患者の生活の質は劇的に向上し、平均余命は高くなりつつあるが、その反面、定期補充療法が浸透し、非凝固因子製剤も広く使われるようになった近年、世界的に血友病における高血圧や心血管疾患・血栓性疾患などの加齢に関連する合併症の報告が増加している。

虚血性疾患を合併した血友病患者の「止血」と「抗凝固」のバランスをどう取るかは非常にChallengingなテーマである。本講演の中では実際の症例を交えて臨床現場でどのようにそのバランスを考えているかを紹介し、筆者が本邦の主要な成人血友病診療施設と共同研究した結果から、日本人成人血友病患者の現状と、現時点で最新の問題点とその状況について概説する。

共催：積水メディカル株式会社

■ランチョンセミナー14. 「検査室大改造！！劇的ビフォーアフター ～中規模病院へのコンパクト搬送システム導入による効果～」

演者：中川 誠（小林病院 検査科）

座長：坂部 博志（社会医療法人仙養会 北摂総合病院）

地方都市の民間中小病院である当院検査室の従来からの課題は大きく分けると3つある。

- ① 人員の確保（補充人員の募集・採用・育成）
- ② 検体検査の業務省力化を図れる仕組みの構築
- ③ ミス・エラーの防止（リスクの回避）

その問題の改善対策を検討し、改善の主軸として「ミドルウェアが管理する搬送システムの導入」することとした。

結果、検体検査の業務の省力化とリスク回避に大きく貢献することになった。

今後、臨床検査技師の職域はますます広がっていくことが予測され、検査室の運用改善は一段と必要に迫られてくる。

その対策として、「検体搬送システムと検査業務を運用・管理するミドルウェア」の事例をご紹介します。

共催：オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社

■ランチョンセミナー15. 「～ここだけは押さえておきたい～動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2022 年度版改訂のポイント」

演 者：三井田 孝（順天堂大学大学院医学研究科 臨床病態検査医学）

座 長：田中 忍（奈良県立医科大学附属病院 中央臨床検査部）

動脈硬化性疾患には、狭心症や心筋梗塞などの冠動脈疾患と非心原性の脳梗塞や末梢動脈疾患などが含まれる。脂質異常症は動脈硬化性疾患の主要危険因子の一つで、診断と治療方針は「動脈硬化性疾患予防ガイドライン」として発表されてきた。今年は5年ぶりに改訂が行われ、7月に全文が公開された。今回の改訂の目玉は、脂質異常症のスクリーニングに随時採血が許容されてトリグリセライドの随時採血のカットオフ値が示されたこと、アウトカムとして冠動脈疾患だけでなくアテローム血栓性脳梗塞も含む久山町研究をもとにした新しいリスクスコアが採用されたことなどが挙げられる。セミナーでは、その他の注意点などについても解説する。

共催：ミナリスメディカル株式会社

■ランチョンセミナー16. 「免疫抑制剤タクロリムスの院内測定における課題とルミパルス L2400 による運用改善」

演 者：岡崎 一幸（京都大学医学部附属病院 検査部システム部門）

座 長：西山 有紀子（京都大学医学部附属病院 検査部）

今回のランチョンセミナーは、京都大学医学部附属病院 検査部システム部門 岡崎 一幸 先生にご講演をお願いしております。

タクロリムスに代表される免疫抑制剤の治療薬物モニタリングには全血検体が用いられますが、これまで全血検体の前処理が臨床検査の場において大きな負担となっていました。

本セミナーでは、富士レビオ株式会社が開発した前処理不要なタクロリムス測定試薬 ルミパルスプレスト iTACT タクロリムスの評価結果や、当試薬により改善される臨床検査現場の運用についてご説明いただきます。

共催：富士レビオ株式会社

■ランチョンセミナー17. 「情報活用した採血業務の改革／患者負担軽減と効果」

演 者：秋永 理恵（株式会社麻生 飯塚病院 中央検査部）

座 長：下田 勝二（株式会社 LSI メディエンス）

現在、多くの御施設では採血システムの導入がされています。その目的は採血管準備、患者間違いを防ぐための照合機能、患者のクレーム対応歴閲覧などで、採血業務をサポートしています。このシステムを利用して失敗しない採血を実現するためのプログラムを開発しました。その導入前後の採血失敗率および採血待ち時間などを比較し、このプログラムの有効性について報告するとともに、採血初心者にとってもストレス軽減につながる可能性についても報告いたします。

共催：小林クリエイト株式会社

■ランチョンセミナー18. 「血液内科診療体制のあるべき姿～患者と既存医療の懸け橋として～」

演 者：太田 健介（LIGARE 血液内科太田クリニック・心斎橋）
座 長：久保田 浩（大阪公立大学医学部附属病院中央臨床検査部）

血液疾患は、治療の進歩により闘病生活が長期化するケースが多く、患者やその家族はもとより、血液内科専門医の負担は年々大きくなっている。こうした課題を解決すべく、2018年に大阪の心斎橋に血液内科専門のクリニックを開設した。

対象疾患は、白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍、また、再生不良性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、溶血性貧血などの非腫瘍性血液疾患まで多岐にわたる。これらを外来診療として扱うため、診断前の血液検査はもちろん化学療法を行うためのスタッフや機器類も大学病院並みに充実させている。当日は、当院の実績を振り返りながら、今後の課題や展望についても話をしたい。

共催：株式会社日立ハイテク

■ランチョンセミナー19.「呼吸器感染症における迅速診断の重要性」

演 者：大石 智洋（川崎医科大学 臨床感染症学教室）
座 長：岡田 賢司（福岡看護大学 基礎・基礎看護部門 基礎・専門基礎分野）

呼吸器感染症は、感染症の中でもその頻度がとて高く、一次医療機関から三次医療機関まで多くの医療機関にて診療しなければならないが、その診断は臨床症状のみでは困難なことが少なくない。

その診断法として、これまでクリニック等では抗原検査キットが汎用されてきたが、近年、簡便かつ低コストのPCR法等の遺伝子増幅機器が開発され、多くの医療機関にて利用が可能となった。実際の診療の場では、実際は抗原検査ではカバーできない部分を、遺伝子増幅装置で補うことが現実的な運用といえる。

本セミナーでは、呼吸器感染症における迅速診断の重要性について、診断法の特徴や、実際の診療での運用法などを中心に概説したい。

共催：東洋紡株式会社

■ランチョンセミナー20.

講演1：「当院で経験した異常ヘモグロビン症
～HA8180VのVariantモード測定が有用であった例を中心に～」

演 者：木下 真紀（天理よろづ相談所病院 臨床検査部）
講演2：「糖尿病診療における血糖モニタリング指標の活用」
演 者：芳野 啓（神戸大学医学部附属病院 糖尿病・内分泌内科）
座 長：古田 眞智（和歌山県立医科大学 医学部 臨床検査医学講座）

HbA1cは血糖代謝状態をモニターする代表的な指標でありその歴史は古い。本邦ではHbA1c測定の専用装置が1981年に発売され、以来40年以上にわたって測定され続けている。

一方でHbA1cと血糖値など他の指標に乖離が生じる原因も多数存在し、その一つに変異ヘモグロビン（以下変異Hb）症例がある。近年では変異Hbの検出や一部分離が可能なHbA1c測定装置も販売されてきている。

講演①では変異Hbの分離・検出が可能なアダムス A1c HA-8180V（アークレイ）を使用したHbA1c測定の運用や、実際に経験した変異ヘモグロビン症例について紹介する。

講演②では糖尿病症例を通じて、診療現場での検査値の活用や血糖マネジメント指標の使い分けの実際について解説したい。

共催：アークレイマーケティング株式会社